

# 論文の内容の要旨

論文題目 近代以降における日本語の受身の変遷  
—非情の受身を中心に—

氏名 ハンジョンヨン  
韓静妍

本稿では、近代以降の日本語における非情の受身の発達を探ることを目的とし、近代以降の文学作品を対象に非情の受身の用例を調べ、その具体的な発達の過程および様相を年代別に示した。また、非情の受身の本格的な発達において一次的なきっかけになったと思われる西洋語の翻訳文体の影響を確かめるため、近代初期の翻訳文献における非情の受身の様相も同様に年代別に示した上で、日本文学作品における非情の受身の様相と比較し、影響関係を明らかにすることを目指した。さらに、非情の受身が発達した日本語内部の動因として、無対他動詞の自動詞的対応項への要求が働いている可能性について考えてみた。各章で報告している内容は次のようである。

第1章では、研究の目的を述べた上で先行研究を検討し、研究対象および研究方法を示した。

第2章では、近代以降の日本文学作品を対象に、非情の受身の使用頻度の増加および新しい種類の拡張していく過程を示した。その結果、以下のようなことを明らかにした。

- ① 近代以降の日本語における受身の使用頻度の増加は、専ら非情の受身の使用頻度の増加によるものである。有情の受身の使用頻度には規則的な変化が全く見られない。
- ② 1890年代までは近代以前と同じ水準の使用頻度を見せていた非情の受身は、1900年代から段々増加し、1940年代からは受身の全用例において約43～45%の割合を占めていた。
- ③ 先行研究によれば、近代以前の非情の受身は、ほとんどが具体名詞を主語として結果状態を表

すものだったのであるが、近代以降は出来事を表す用例や抽象名詞を主語とする用例が段々増加し、1940年代からは出来事を表す用例が約58%の割合を、抽象名詞を主語とする用例が40～45%の割合を占めるようになっていた。

第3章では、近代以降の日本文学作品を対象に、動作対象・動作主・動作という三つの観点から非情の受身の具体的な様相を調べた。その結果、以下のようなことが観察された。

① 非情の受身の動作対象に当たる主語名詞としては、近代以前から用いられていた自然・物体・身体などを表す名詞が相変わらず高い割合を占めていたが、その数値は合わせて50～60%に減っていた。近代以降発達した抽象名詞主語の中では、動作性のない抽象概念を表す名詞が特に発達し、1940年代からは20%以上といった安定した割合で現れていた。

② 非情の受身の動作主は、表示されていないものが最も多いが、表示されている場合は「に」が相変わらず最も多く用いられていた。一方、近代以降発達したと言われる「によって」による動作主表示は、僅かな割合でしか見られなかった。

③ 非情の受身においては有情の動作主を「に」で表示できないと言われているが、本稿の調べによっても、実際、「に」で表示されている動作主のほとんどは非情物であった。有情の動作主を「に」で表示している非情の受身は、有情物と何らかの関わりを持つような用例がほとんどであった。

④ 「によって」で表示されている動作主は、「に」に置き換えられる場合は省略できないことに対し、「に」に置き換えられない場合は省略できる場合が多かった。「に」は必須の動作主を示すのに対し、「によって」でしか表示できないものは原因または手段を表す修飾語であることによると考えられる。

⑤ 非情の受身において行われている動作を表す上接動詞を自他対応の有無により分類すれば、無対他動詞による非情の受身の急増が目立っていた。

⑥ 上接動詞を意味類型により変化動詞・発生动詞・実行動詞・無変化動詞に分ければ、変化動詞による非情の受身が年代にかかわらず60%以上といった高い割合を占めていた。一方、その他の種類の動詞によるものは、1900年代まではほとんど変らない用例数を見せているが、その後、無変化動詞による非情の受身が他の類型より大幅に増加し、1940年代からは20%以上の割合を占めていた。

⑦ 状態性・出来事性の観点から見れば、変化動詞による非情の受身は他の類型より状態を表すものがやや多く、ほとんどの年代において半分以上を占めており、発生动詞による非情の受身においては状態を表すものの割合がさらに高かった。一方、実行動詞による非情の受身はほとんどすべてが出来事を表す用例であり、無変化動詞による非情の受身も出来事を表すものが圧倒的に多かった。

⑧ 自他対応の有無という観点から見れば、非情の受身に用いられている変化動詞は、非情の受身の平均より有対他動詞の割合がやや高かった。一方、非情の受身に用いられている発生动詞および無変化動詞は、ほとんどが無対他動詞であった。

第4章では、近代以降の日本語の非情の受身における西洋語の翻訳文体の影響を確かめるために、近代初期の翻訳文献を文学作品と学問・思想書とに分け、第2章と第3章で明らかにした近代以降の日本文学作品における非情の受身の様相がどのように現れているかを比較した。

① 日本語の非情の受身における発達様相は、翻訳文学作品においても日本文学作品よりはやや早い時期から見られるが、文学作品という内容的な特性により、日本文学作品以上の発達様相は見られないのに対し、翻訳思想書においては日本語の非情の受身において近代以降発達した類型が近代初期から遥かに高い割合で現れていた。即ち、近代以降の日本語の非情の受身の発達には、翻訳文献の中でも学問・思想書の影響がより強力であったと推し量ることができると思われる。

② 日本文学作品においてあまり見られなかった「によって」による動作主表示は、翻訳文学作品においても僅かな割合でしか用いられていなかった。一方、翻訳思想書においては、「に」による動作主表示の割合が日本文学作品および翻訳文学作品に比べて遥かに低く、その代わりに1880年代までは「のため(に)」、1890年代からは「によって」による動作主表示が最も高い割合を占めていた。翻訳思想書の非情の受身における動作主表示「によって」は、「に」に置き換えられないものがほとんどであった。つまり、客観的・中立的な文体の特性によって選ばれているよりは、「によって」で表示されている動作主が「に」で表示できるような必須の動作主でなく、原因または手段を表しているのに過ぎないため、修飾語として表示するほかなく、必然的に選ばれていると考えられる。

第5章では、近代以降の非情の受身の発達における日本語内部の動因として、自動詞的対応項への要求が働いている可能性を検討するために、自動詞に近いと考えられる非情の受身の発達について観察した。その結果、以下のようなことを明らかにした。

① 対になる自動詞を持たない無対他動詞において受身が自動詞的対応項として働いているとすれば、第3章で示した通り、無対他動詞による非情の受身は有対他動詞による非情の受身より遥かに高い割合で非情の受身の急増を牽引していたのであり、非情の受身の発達に決定的な役割をしていると考えることができる。

② この中、動作主が表示されているものは自動詞に近いとは考えられないとし、動作主が表示されていないものに限定するとすれば、無対他動詞による非情の受身の中で動作主が表示されていない用例が特に急増していることが観察された。

③ 動作主が表示されていないものの中でも動作主が文脈から特定できる場合よりは動作主が特定できない場合がより自動詞に近いと考えられるのであるが、無対他動詞による非情の受身の中で動作主が表示されておらず、特定することもできないものは、段々増加し、1940年代からは非情の受身の全用例の40%以上に至っていた。

④ 無対他動詞による非情の受身のみならず、有対他動詞による非情の受身の中にも自動詞に近いと考えられるものが存在するのであるが、自動詞に近い非情の受身の増加とともに、同じ非情物を主語とする有対自動詞による表現も近代以降、増加していた。両者は競合の様相よりは相互増加の様相

を見せており、非情物を主語とする自動詞的な表現が近代以降、全体的に増加していると考えられることができると思われる。

以上、本稿では、近代以降の日本語における非情の受身の発達を探ることを目的として、近代以降の日本文学作品における非情の受身の発達の様相を年代別に示すことにより、日本語における非情の受身の定着までの過程を明らかにした。また、近代初期の翻訳文献における非情の受身の様相を示し、日本語の非情の受身の発達における西洋語の翻訳文体の影響を検証した。さらに、日本語内部の動因として考えられる無対他動詞の自動詞的対応項への要求に注目し、動作主に関心を持たずに動作対象を中心として述べる自動詞に近い非情の受身が近代以降の非情の受身の急増に大きな役割を果たしていることについて考えてみた。このような作業によって、近代以降の日本語における非情の受身の発達の過程およびその発達要因についてある程度具体的な様相を提示することができたのではないかとと思われる。